

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-190	15-111	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
Sex Differences in Substance Use Among Adult Emergency Department Patients: Prevalence, Severity, and Need for Intervention. 成人救急治療部患者の薬物使用における性差：有病率、重症度、治療介入の必要度		
執筆者		
Beaudoin FL, Baird J, Liu T, Merchant RC.		
掲載誌		
Acad Emerg Med. 2015 Nov;22(11):1307-15. doi: 10.1111/acem.12810.		
キーワード		PMID
救急治療部、性差、薬物乱用、有病率		26473942
要 旨		
<p>目的： 薬物使用は救急治療部(ED)の患者間でしばしば認められ、性別は薬物使用障害の病因、病態生理学、後遺症と治療における重要な要因である。本研究は成人 ED 患者が自己申告した喫煙、飲酒と薬物使用の重症度と有病率に性差があるかを調査した。</p> <p>方法： 2010年6月から2012年12月まで30か月以上同時に行われた2つの臨床試験データの後ろ向きサブ解析。対象は2都市のEDで英語またはスペイン語を話し、危篤状態や重症ではない18-64歳の患者から無作為に抽出された。生涯と過去3カ月の喫煙、飲酒と薬物使用を自己申告で調査した。参加者は音声コンピューターを利用したインタビューによるAlcohol, Smoking Substance Involvement Screening Test (ASSIST)を完了し、そのASSISTスコアから世界保健機関が推奨する薬物の重症度と短期またはより集中的な介入の必要度に分類された。薬物の不正使用の流行、頻度、重症度と介入の必要性を、薬物のカテゴリー別に、性別間で比較した。社会人口統計学的患者背景の調整後、多変量ロジスティック回帰モデルを用いて性別と介入の必要度間の関連を調べた。</p> <p>結果： 参加者6,432名中、年齢中央値37歳(四分位範囲=26-48歳)、女性56.6%。全体的に生涯そして過去3カ月の使用は、すべての薬物(喫煙、飲酒と薬)で男性がより高かった。過去3カ月の使用報告では、頻度は喫煙やすべての薬において性別間で共通していたが、男性はより頻繁な飲酒を報告した。女性と比較し、男性の平均ASSISTスコアはより高かった(30.3(標準誤差[SE]±0.8)対21.1(SE±0.5));平均差9.2(95%信頼区間[CI]=7.4-10.9)。いかなる介入(短期あるいは集中的な)の必要度もタバコと薬は性別間で同様であった。社会人口統計学的要因の調整後、女性は飲酒へ介入必要度は男性より少ない傾向であった(オッズ比[OR]=0.6;95%CI=0.4-0.8)、しかし他の薬物では、性差を認めなかった(タバコ(OR=0.9;95%CI=0.6-1.3)、マリファナ(OR=0.8;95%CI=0.6-1.1)、または他の薬(OR=1.1;95%CI=0.7-1.7))。</p> <p>結論： 全体的には男性の薬物使用率が高いが、頻度と重症度は大部分で男女同様であった。患者背景調整後、性別は飲酒への介入必要度と関連を示した。</p>		